中部圏広域地方計画について

奥野信宏

1　中部圏広域地方計画の特徴

(1)高い質の生活空間の形成

(2)ものづくりの世界的拠点

(3)新たな大都市圏の形成

(4)安全・安心な中部圏

(1)高い質の生活空間の形成

○コンパクト＋ネットワーク

・地域の隅々までの豊かさの追求
・人口減少・高齢化のもとで、広域連携により高度な都市的サービスを提供

(2)ものづくりの世界的拠点

○世界のものづくり産業の拠点となる

・第２次中部圏広域地方計画(２０１６年3月)を継承

○新たなテーマ

・スタートアップの支援
・カーボンニュートラル、デジタル技術などＤＸへの対応等

(3)大都市圏の機能強化

○日本中央回廊（スーパーメガリージョン）の中核地域

・東京、名古屋、大阪が一体となって成長の核（コア）となる
・「列島隅々までの豊かさの追求」だが、国の社会経済を牽引するセンター地域は必要

○東京一極集中による成長からの決別

・極度の一極集中は国の安全性を脅かす

○デジタル田園都市国家構想

・中間駅におけるリモートワーク拠点の整備等

(4)安全・安心な中部圏

○南海トラフ中部圏戦略会議の活動

○各地の自然災害への目配り

・内陸地震、洪水、地滑り・山崩れ・土砂災害等
・内陸部のリダンダンシーの確保
・水供給の安定性の確保、老朽化したインフラの強化

2　北陸圏・中部圏の広域連携

○交流連携が新たな価値を生む

・国土計画を貫く基本理念
・地域の住民連携、広域連携、国際的連携等

○道路・情報通信等のハードの利活用

・ハードの整備から整備されたハードの利活用へ
・進む東海北陸自動車道、中部縦貫自動車道等の整備
・昇竜道等の観光交流、高速道路を利用した広域観光プロジェクトの提起

○北陸圏と連携した生活・産業空間の形成

・リニア効果の北陸圏・中部圏全域への波及
・東海北陸自動車道等の沿線地域相互の交流

○新幹線敦賀・米原ルートの整備

・名古屋でリニアに接続の利便性

3　多様な主体による圏域づくり

○普通の市民・民間が公共を担う

・多様な主体の参加と「新たな公」(平成20年の国土形成計画)と
・街のハードの整備は行政の役割、街を磨くのはNPO等多様な主体
・人口減少・高齢化に直面する地域の維持、利便性の向上の鍵
・広域連携による活動への期待

○重要な官民連携

・民間が活動し、行政が支援
・行政が主導し、民間が追随

○人の繋がりの強化

・平時の楽しみ、有事の強靱化